The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持
Author(s)	黄, 永熙
Citation	阪大日本語研究. 2008, 20, p. 119-150
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』20（2008）

韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持

L2 retention as observed in the negations of Japanese spoken by Korean elders

黄　永熙
HWANG Younghee

キーワード：韓国高年層日本語、否定形式、第二言語の保持、言語内的・外的要因

【要旨】

本稿は、韓国高年層話者８人と日本語母語話者との談話を採集し、植民地時代に習得した韓国高年層日本語に見られる否定表現を第二言語の保持という観点から考察したものである。その結果、使用する環境がないまま60年以上潜伏していた韓国高年層日本語の否定表現には、方言形の保持（a）（b）、標準形の保持（c）という点で次のような特徴があることが明らかになった。

(a) 方言形ンの保持度は全体的に低いが、話者別に見ると、その保持度は戦前の日本語との接触度におおよそ比例する。また、他地域における高年層日本語と比較してみたところ、日本人教師によるインプットや戦後の日本語使用環境が多い場合ほど（在日＞台湾＞韓国）、方言形ン保持の強い要因となることがわかった（§4.）。

(b) 方言形ンは、〔対中年談話〕では回避され、〔対若年談話〕でよく出現するインフォーマルな形式である。また、前接する動詞の種類ごとに見ると、ンは、「ワカル＞2拍五段動詞＞（2拍以外の）五段動詞＞サ変・カ変・一段動詞」の順で保持されやすい。また、「強い打消し」というモーダル性を保ち、終助詞との共起や人称に関して制約を受ける（§5.）。

(c) 一方、母語話者の日本語と同じ形式としては、ナイデ中止法やジャナイ否定の使用が、また、韓国語の分析的統語構造の転移（コトナイ）などが、小学校卒業後、職場で日本語を使用したグループを中心によく見られ、一般的な習得の過程と一致する形で保持されている（§6.）。

1．はじめに

韓国高年層は、日本の植民地統治時代に習得した日本語を今でもよく保持している（以下、「韓国高年層日本語」とする）。この韓国高年層日本語は、かつて、教室場面での学習と、日本人との接触を通しての自然習得により身につけられたものである。植民地時代の韓国には（教師を含め）西日本出身者が多く在住していたため、その日本語には当該地方の方言的要素も一部取り込まれている[1)]。

当時、西日本方言的な言い回しに対し、教師が標準語を教えるよう働きかけることもあったようで、生徒の西日本的な日本語の使用実態に関する記述も多く見られる[2)]。

以下、本稿では、60年以上使用されないままの状態に置かれた韓国高年層日本語の否定表現について、第二言語保持の観点から記述・説明していく。

まず、§2.では第二言語保持の特色を見るためになぜ否定表現を取り上げるのかについて、§3.では調査の概要について説明する。その後、§4.で韓国高年層日本語の否定表現の使用実態を確認し、§5.でその実態と関わる言語内的・外的要因を究明する。最後に、§6.でまとめを行う。

2．問題のありか

2. 1. 第二言語保持研究へのアプローチ

ある言語の習得を終了してのち、その言語を使用できなく／しなくなる過程を明らかにしようとする場合、その言語がL1であるかL2であるか、L1の環境にあるかL2の環境にあるかなどに分けて論じられることが多い（van Els1986）。

また、Gardner（1982）は、言語能力の変容のあり方に注目し、言語習得の終了時点と現時点での言語能力を比較したときに、能力が一定の水準で落ち着いている場合、またはよくなった場合を「language retention」、悪くなった場合を「language attrition」として区別するとともに、言語習得の終了時点以降を潜伏期（the incubation period）とよぶべきことを提案している[3)]。

それ以外にも、過去のある時点にさかのぼって自分の言語能力について自己評価してもらう質問調査などが潜伏期の言語変化を見る方法として提案され、ほとんどの話者が過去の言語能力のほうを高く評価していることが報告されている（Jaspaert、Kroon & van Hout 1986）。

本稿で取り上げる韓国高年層日本語は、いまとなっては言語習得終了時点における話者

の日本語能力を知る方法がないものの、韓国高年層の人々が過去の日本語能力に比べて現在の日本語能力を低く評価している点から、L1環境におけるL2のattritionとして理解するのが妥当である。

しかしながら、第二言語を習得する環境がなくなり、潜伏期が非常に長くなっても喪失の度合いが高まるとは限らないケースも多いことが指摘されている。台湾や旧南洋群島などの、環太平洋地域の旧植民地の日本語も、第二言語が50年以上喪失されてない例であろう（Hayashi1999、簡2004）。

以下、本稿では、日本語の習得が行われなくなった環境の中で長い年月が経過し、話し手も、かつての日本語能力が衰えている（または同等である）という自覚をもっていながら、日本語母語話者と日本語のみでコミュニケーションができるほどの日本語を保ち続けていることを、個人における「第二言語（この場合日本語）の保持」として言及する。

2. 2. なぜ否定表現なのか

それでは、なぜ否定表現が韓国高年層日本語の保持のあり方を見るために適切な言語項目なのか。このことについては、以下の四つの理由を挙げることができる。

(a) 否定表現は（標準語形を含めて）多様な変異形を有し、標準語形と方言形の接触現象や習得後のバリエーションの変化を見ることができる[4]。

(b) 本稿の調査では、言語習得終了時点（＝1945年）以降、日本語と接触していないインフォーマントを選出したため、（メディアを通した接触は少ないと考えられる）方言形ンは1945年以前に習得されたものといえる。このため、習得終了以前に習得された言語項目の保持のあり方を見ることができる。

(c) 韓国高年層においては、方言形ンは、保持されている方言的要素のなかで、オルとともにその使用がもっとも多い。

(d) 学習者日本語の否定表現に関する先行研究には、かつて標準語形ナイと方言形ンの両方に接触した台湾高年層日本語において、ンがインフォーマルな形式として活用されているとする簡（2006）や、否定形式習得に普遍的プロセスがあるという家村（2001）などがあるものの[5]、研究の数はそれほど多くはない。

以上のことをふまえ、本稿では、日本語を保持する、一定の社会的属性（日本語の習得期間・日本語との接触形態）をもった韓国高年層を対象に、その使用する否定表現のバリエーションの現れ方を左右する言語内的・言語外的要因を分析することを試みる。具体的

には、話者の社会的属性、使用意識、同一話者によるスタイル切換え、前接する動詞のタイプ、非標準語形の否定形式、母語の影響という点から、形式的・機能的特徴を明らかにすることを目指す。

3．調査の概要

本稿では、一見すると不規則な状況を呈しているように見える韓国高年層日本語の否定表現について、話者の社会的属性およびスタイルによる違いを整理し、そのバリエーションの中に規則性を見出すことを試みる。この目的のために、韓国高年層話者が保持する否定表現の実態について理解能力と使用能力を網羅的に引き出すことのできる、次のような調査をデザインした。

3. 1. 調査地点・期間

一定の属性をもつ高年層日本語話者が多数居住する、韓国の大都市ソウルと大邱（デグ）をフィールドにして調査を行った。この地域は、戦前の韓国内での道別人口がそれぞれ１位と３位であり、普通学校の学生数ではそれぞれ１位と２位を占めている。特に、大邱は地理的に日本に近いということもあり、戦時中、多くの日本人が滞在していた[6]。このことを反映して、現在も、その日常的な生活語（慶尚方言）の中に、日本語の語彙（たとえば、座布団［ʧabudoŋ］、上着［uwagi］、爪切り［s'ɯmek'iri］など）が数多く残されている。

筆者は、2003年３～４月（15名）、2004年８～９月（７名）、2005年９月（３名）、2006年５月（３名）にわたって予備的な調査を4回実施し（以下、「予備調査」とする）、本調査を2006年８月（13名）に行った。

3. 2. インフォーマント

本稿では、本調査で採集したデータのうち、話者の属性や談話態度からみて言語保持の考察にもっとも適切と判断した高年層男女８名のデータを用いる（2006年の調査時現在で77歳以上）[7]。これらのインフォーマントは戦時中に日本語（国語）教育を受けており、言語習得終了時点（＝1945年）は一致するが、習得期間や接触形態は異なっている。それら当時の日本語習得環境によってインフォーマントを分けると、次のようになる。

(a) 小学校卒業までの習得層（P層）
(b) 小学校卒業まで習得後、職場でも日本語を使用した層（W層）

(c) 中学校卒業までの習得層（M層）

インフォーマントそれぞれの属性については、表1にまとめる。表1では、話者を学歴や職歴の両面から習得期間が長い順に並べているが、現在の日本語能力の高さは〔話者1M＞2M＞3W＞4M＞5P＞6W＝7P＞8P〕の順と思われる（話者番号の数字は日本語能力順を、ローマ字はそれぞれ上にあげた習得環境を示す）。

表1　インフォーマント一覧

話者	生年	性別	日本語学習歴*	戦前の職歴
4M	1927	男	普通学校（6年）・中学校（5年）	―
6W	1928	女	国民学校（6年）・小学校高等科（2年）	バス会社（3年）
2M	1928	女	尋常小学校（6年）・高等女学校（4年）	―
1M	1920	女	普通学校（6年）・家政女学校（3年）	―
3W	1926	男	普通学校（6年）	電力会社（2年）
5P	1926	女	国民学校（6年）	―
7P	1927	女	国民学校（6年）	―
8P	1930	女	国民学校（6年）	―

*植民地時代の教育は、日本人を対象とする初等教育は「小学校」、朝鮮人を対象とする初等教育は「普通学校」で行われていたが、1938年の朝鮮教育令の改訂により「普通学校」は「(尋常)小学校」と改められ、1941年に両者とも「国民学校」と改称された。表の中学校・家政女学校・高等女学校は6年制普通学校（国民学校）を終えた人が進学できる学校である。また、話者4Mの中学校は生徒が韓国人のみであった。しかし、話者6W・2M・1Mの小学校高等科・高等女学校・家政女学校は日本人との共学であった。

これを、大雑把にグループ分けすれば、話者1M・2M・3Wが能力高、話者4M・5P・6W・7Pが中程度、話者8Pが低となる[8]。インフォーマントの選定にあたっては、当初、〔M層＞W層＞P層〕という階層関係を念頭に置いていたが、上のように、現在の日本語能力とは若干ずれるところがある。

なお、話者5Pと7Pは（2004年から）隣人同士の親友であり、遊び場で日本語の歌を一緒に歌うこともある。ほかのインフォーマントはそのようなネットワークに属さない。

3. 3. 調査方法

3. 3. 1. 談話調査

インフォーマント全員について、中年層の日本語母語話者との会話（以下、〔対中年談話〕）を収録した。また、8名のうち4名（話者4M・3W・5P・7P）については、スタイルによる違いを見るために、若年層の日本語母語話者を相手とした談話（以下、〔対若年談話〕）もあわせて収録した（合計530分、平均44分）。日本人インタビュアに関する情報は、

以下のとおりである。

〔中年層日本語母語話者〕NS1（40代女性・秋田出身）、NS2（40代女性・福岡出身）
〔若年層日本語母語話者〕NS3（20代男性・宮崎出身）、NS4（30代男性・大阪出身）

異なる日本語母語話者との談話を収録することによって、高年層が持っている日本語のスタイルをできるだけ多く引き出すことは、現時点での、保持段階にある日本語を網羅的に採取するための最善策と考えられる[9]。

3. 3. 2. 聞き取り調査および内省調査

一方、それぞれのインフォーマントには、談話データのなかには現われない（知識として持っている）バリエーションもあると予測される。そこで、潜伏的な言語能力を確認するため、また、差し迫った状況で産出される形式が何であるかを明らかにするために、普通体の動詞否定文（平叙文・可能文・存在文）を日本語に訳してもらう翻訳式の規範意識調査を談話収録後に実施した（同時に習得環境に関する聞き取り調査も行った）。

また、それとは別に、使用頻度の高いワカランという形式について、ワカラン・ワカラナイデス・ワカリマセンの３つの表現を例示しながら、その違いについて尋ねる調査もあわせて行った。

つまり、まず談話調査によってインフォーマントが使用する、または使用しないバリエーションを明らかにし、次に追加調査として、それらのバリエーションについて、(a) 方言形否定表現を知っているか、(b) 知っていればどういう時に使うか（使っていたか）を内省してもらったわけである。

４．否定表現の使用実態

本節では、まず、話者たちがどのような否定表現形式を使用しているかを、動詞、イ形容詞、ナ形容詞・名詞に分けて整理する（§4.1、4.2、4.3）。ついで、話者の属性と否定形使用の相関関係をまとめ（§4.4）、最後に、当該日本語を他地域の高年層日本語と比較することによって、韓国高年層日本語の否定表現の特徴をさらに浮き彫りにすることを試みる（§4.5）。

4. 1. 動詞の否定形

まず、収録した会話データから見出される否定表現で、もっとも使用数が多く、方言形も使われる、動詞の否定形から見る。表２は、動詞の否定形を、一部前後の形式とあわせて示したものである。

表２　動詞否定形の使用状況

話者 / 形式	4M		6W	2M	1M	3W		5P		7P		8P	計
	中	若				中	若	中	若	中	若		
ン	1	4	1	1(i)	1	-	1(ii)	-	-	-	2	-	11
ナイ	5	7	3	10	33	23	23	16	19	10	11	6	166
ナイデ	1	-	4	2	-	2	-	1	-	2	1	-	13
ナクテ	-	1	3	-	3	-	1(iii)	-	-	-	-	-	8
コトナイ	1	4	-	-	1	-	1	7	2	-	-	-	16
ンジャナイ(確認要求)	-	-	-	-	-	-	-	-	2(iv)	-	-	-	2
ンジャナイ(否定)	-	-	-	-	2	4(v)	-	-	-	-	-	-	6
ジャナイ(確認要求)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3
ジャナイ(否定)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ン＋デス	6	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
ナイデス	1	1	16	11	2	10	1	7	4	5	4	6	68
マセン	-	-	6	1	2	-	-	-	-	21	1	7	38

*中は〔対中年談話〕、若は〔対若年談話〕を示す（以下同様）。表の作成にあたって、ナカッタはナイに、ナイデショウはナイデスに含めた。また、「～しないといけない」のように慣用的な当為表現は除いた。（ｉ）は引用の例「先生から“そんな、言葉使ったらイカン”と」、（ii）はンとナイが重なって生起した例「ちょっとそれは分カランナイ」、（iii）はナクテモ、（iv）は２例ともデス体、（ｖ）のうち２例はデス体。

以下、動詞の否定形を普通体（§4.1.1）と丁寧体（§4.1.2）に分けて、その使用実態を整理する。

4. 1. 1. 普通体

表２から分かるように、普通体の動詞否定形は〔標準語形ナイ（214例）：方言形ン（11例）〕の２つが使用されている。話者5P・8Pはンを用いず[10]、ナイのみを用い、話者4M・6W・1M・7Pはンとナイを併用している。話者2M・3Wには、表２の注（ｉ）（ii）として記したような形でンの使用が見られる。このように、方言形ンは習得期間が長い話者によく見られ、習得期間がもっとも長い話者4Mに使用が集中している。

また、主節で方言形ンを用いているのは、話者4M（４例）・1M（１例）・7P（２例）の７例である(1)。このうち、話者4Mは、例(2)のように従属節内でもンを用いている[11]。(例

文中の（　）は筆者による注釈、点線は全体の記述とかかわるところ。以下同様。）

(1) 1M：それ（入れ歯）を入れたら、味が分カラン。
(2) 4M：私も、あの学生を分カランデスよ。分カランのに、うちに、〔対中年〕

なお、表2には含まれていないが、慣用的な当為表現として「あがらないとイケナイ(1M)」「行けなければナラナイ（5P)」が見られる一方、話者7Pには「(日本旅行にお金を）持ってゆけなければデキマセン」「使ったらイカナイ」「歌わないとイケマセン」のように不安定な使用が見られる。このデキマセンは、イケナイ・ナラナイが入るべきところにイクコトガデキマセンを単純化したデキマセンを用いたものであり、その次のイカナイは、西日本方言の表現法〔表２の注（ｉ）のイカン〕が標準語形ナイに単純置換されたものと考えられる（台湾の高年層日本語を記述した簡（2006）を参照)。

ちなみに、言語習得の初期段階でよく見られる「動詞辞書形＋ナイ」のようなミスが話者3Wに見られたが（3)、

(3) 3W：昭和15年以降は朝鮮語使ウナカッタ。〔対若年〕

表２に示した否定表現の全用例341例中、動詞活用のミスはわずか５例であった〔後述の例（28）（29）および「住ミナイデ」「使レナイ」(いずれも話者5Pの例)〕。

4. 1. 2. 丁寧体

次に、丁寧体においては、(a) マセン（38例、話者6W・2M・1M・7P・8P)、(b) その分析的な形式であるナイデス（68例、すべての話者)、(c) 否定辞ン＋デス（10例、話者4M・6W、以下「ンデス」とする）が用いられている。以下、具体的に述べる。

(a) マセン

話者7Pは〔対中年場面〕でマセンの使用が著しく多いが（21例)、男性話者4M・3Wと女性話者のうち5Pには、現代日本語で一般的にあらたまり度が高いとされるマセンの使用が見当たらない[12]。使用されたマセンは、いずれの場合も、「ワカリマセン（14例)、アリマセン（８例)、デキマセン（５例)、シマセン（５例)、スミマセン（３例)」などのような、特定の動詞と結びついた慣用的定型表現がほとんどである（38例中35例)。

(b) ナイデス

表２のとおり、マセンより新しい形式と考えられる（福島・上原2003）ナイデスが頻

用されている。このような事例について、本稿と同じく韓国高年層日本語を扱った木口(2004)は、当時の言語生活や教科書の中にナイデスやナカッタデスは出現せず、マセン・マセンデシタが一般的であったとしてインプットによる習得を否定し、前者は日本語が保持される中で分析的に生成されたものとしている。たしかに、当時の日本語(国語)教育が主に規範形を用いて行われたこと[13]、ナイデスがマセンより生産性の高いことは間違いないだろう(表8参照)。

ただ、ここで指摘しておきたいのは、当時、約1割(2,827／20,557人)であった日本人教師ではなく、(非母語話者である)約9割の朝鮮人教師によって非標準形ナイデスやナカッタデスがインプットされた可能性も排除できないことである。

当時の朝鮮人教師の言語問題と関連して、安田(1997：172～173)は、「朝鮮人教員及児童に対し国語使用奨励の方法」『朝鮮彙報』(1915)に書かれている12項目の方法を取り上げながら、朝鮮人教員と内地人の教員との相互点検による国語(日本語)学習があったことを指摘している。

また、朝鮮総督府の学務局職員の記述によれば、師範学校卒業生の半数以上が国語(日本語)を常用語としない朝鮮人であるため、朝鮮人生徒の発音や語法面で非標準的な日本語が多いとされている(森田1942：71)。

当時の朝鮮人教師の日本語能力が相対的に低かったことについては、本稿のインフォーマントの聞き取り調査からも確認された。

(c) ンデス・マセンデス

最後に、非標準的な中間方言形・中間言語形の使用を確認しておく。

話者4M(9例)・6W(1例)には、ンデスが見られるが、例(4)を除くと、そのすべてが例(5)のように動詞ワカルに下接するものである。(発話例の[ ]は、インタビュアの発話である)

(4) 4M：あ、わか、わか、それ、よめ、読マンデスよ。〔対中年〕

(5) 4M：私の妻になる女が、[ええ]、顔がきれいか、[ええ]、とんない、ひ[人か]、人、んな、人か、分カランデスよ。〔対中年〕

話者4Mの全体的な使用数の割合(ンデス9例：ナイデス2例)から見ると、ンデスが話者4Mにとってもっとも自然に出てくる形式(自動化形式)なのかもしれない(4)。一方、普通体でンを使用しているその他の話者(6W・1M・7P)については、ンデスが例(6)の1例(話者6W)しか見られず、話者4M以外ではナイデスが自然に出る形式であると推

測される。

(6) 6W：それから、あれがなにか分カランデスね。

また、表には入れていないが、話者6W・7Pでは「イマセンデス・ワカリマセンデス」のような二重敬語のマセンデスが1例ずつ見られる（7）（8）。話者8Pにも、「ワカリマセンデス（1例)・シマセンデス（3例)」とともに例（9）の「アリマセンデス」が見られた。

(7) 6W：時計hyassta[14]（した）のは、したのは、見えないですよ。[あ、いませんでした？]、あ、イマセンデスよ。
(8) 7P：朝鮮語の、分カリマセンデスから、一つも分かりません。〔対中年〕
(9) 8P：お友達が、あったらいいんですけどね、今はアリマセンデスよ。

そのうち、話者6Wの発話例（7）は、点線の「イマセンデシタ」という母語話者の発話をうけたものである。

4. 1. 3. まとめ

以上、動詞の否定形に関してまとめると、次のようになる。

(a) 普通体の否定辞はナイがほとんどであり、方言形ンを生産的に用いるのは話者4Mのみである（§4.1.1)。
(b) 丁寧体については、話者4Mはンデス、話者4M以外はナイデスがそれぞれ自然に出る否定形式であると考えられる。マセンより多用されているナイデスは、朝鮮人教師によってインプットされた可能性もある。また、女性話者のみに見られるマセンは慣用的使用にとどまっている（§4.1.2)。
(c) その他、安定的な否定表現の産出が行われる一方で、活用ミス（例3）や中間方言形ンデス（例4 ～ 6)、二重敬語（例7 ～ 9）のように、習得の過程で一般に観察される形式も一部（低いレベルの話者）で見られることを確認した。

4. 2. イ形容詞の否定形

表3は、イ形容詞の否定形の使用状況を表にしたものである。

表3　イ形容詞否定形の使用状況

話者 / 形式	4M		6W	2M	1M	3W		5P		7P		8P	計
	中	若				中	若	中	若	中	若		
クナイ	1	-	3	1	2	1	3	1	6(i)	1	-	1	20
ジャナイ(確認要求)	3(ii)	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	6
ジャナイ(否定)	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クナイデ	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
コトナイ	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3

*(i) 少ナイ・行ッテミタクハナイデスは除外。(ii) ジャナイの言いさし「ジャン」を1例含む。

この表から分かるように、全員がクナイの生成能力を持っている。ただし、もっとも能力の低い話者8Pの1例は、日本語母語話者の発話をうけたものである (10)。

(10) NS4：あー、高クナイですか。お寿司は？
　　8P：おし、えー、そうですね。高クナイんですよ。

また、クナイにとりたて助詞ハを挟む否定表現が話者4M・6W・1Mに見られる(11～13)。

(11) 4M：こんなに、暑い、暑クハナイじゃないかと思いますが、私は、〔対中年〕
(12) 6W：近クハナイのに、ちょっと、
(13) 1M：近クハナイけど、あの、車乗って、

このようなクハナイは高いレベルの学習者に見られるものとされるが (家村2001)、動詞否定の方言形ンの使用者と重なっているように考えられる。

次に、話者4M・1M・5Pには確認要求のジャナイが見られるが (14～16)、話者4Mは「ヨイcanhna [ʤaNna]」のように音声的に類似した韓国語が混じり、ぼやかしているところをNS2が発話を助けている。

(14) 4M：考えてみる、ほう、ほうがいいジャン、よい、よい、よいcanhna、よい、よいジャナイ、もう、icepeleyse (忘れてしまって)、[いいじゃないか]、いいジャナイですか。〔対中年〕
(15) 1M：ん、仕事も多いジャナイ。
(16) 5P：あんたは大学ジャナイデスカ。たから難しいンジャナイです→。〔対若年〕
　　(→は、弱い平坦調のイントネーション)

その他、話者6W・7Pには「形容詞＋クナイデ（中止法）」「形容詞＋ジャナイ（否定）」のような非標準的な形式が見られる（17～19）。

(17) 6W：うちで遠クナイデ、そこで、すみますから、
(18) 7P：頭もちょっとilya（こう）痛クナイデそれをしたら、〔対中年〕
(19) 6W:おばあさんたちが国語分かる人、10人だったら［はい］、一人、二人、［ん］、多いジャナイデスよ。

コトナイについては、§6.2で動詞の否定とあわせて述べる。

4. 3. ナ形容詞・名詞の否定形

続いて、ナ形容詞・名詞の否定形の使用状況を表4に示す。

表4　ナ形容詞・名詞否定形の使用状況

形式＼話者	4M		6W	2M	1M	3W		5P		7P		8P	計
	中	若				中	若	中	若	中	若		
ナ形容詞＋ジャナイ(確認要求)	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2
ナ形容詞＋ジャナイ(否定)	1	-	8(i)	-	1	1	-	-	-	-	1	1	13
名詞＋ジャナイ(確認要求)	-	-	-	-	1	2	3	1	1	-	1	-	9
名詞＋ジャナイ(否定)	6	6	5	1	7	3	3	-	-	-	2(ii)	1	34
名詞＋その他(iii)	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	3

*（i）ジャナイデ3例・デハナイ1例、（ii）デハナイデス1例、（iii）左側からデナイ・ダケナイ・デモナイ。また、「オナジクナイ・キレクナイ」のように、イ形容詞型の活用をした例は除く。

ナ形容詞・名詞の否定形はジャナイが一般的である。ただし、話者3W・7Pの例（20）（21）のように、イ形容詞型の活用をしたものも見られる。また、話者6Wには「上手ジャナイデ」のような中間言語形の否定中止法が3例見られる（22）。

(20) 3W：日本語も標準語と地方語、この、異なる。同ジクナイでしょう。〔対中年〕
(21) 7P：キレクナイです。
(22) 6W：国語が上手ジャナイデ、あ、国語ができると思うのに、

一方、名詞否定については、話者1M・3W・5P・7Pに例（23）のような確認要求用法のジャナイが9例見られる。

(23) 3W：自分の祖先が［はい］、この、シラギの人ジャナイか。〔対若年〕

以上、イ形容詞やナ形容詞･名詞の否定では、確認要求のジャナイが広く使われること、「イ形容詞＋クナイデ、イ形容詞＋ジャナイ、ナ形容詞＋クナイ、ナ形容詞＋ジャナイデ」などの非標準形は主に日本語接触度が中程度の話者層に確認されること、逆に、クハナイは日本語接触度の長い話者に集中するということなどが明らかになった。

4. 4. 否定形式の使用からみる話者のパタン

以上、否定形式の使用状況を話者ごとにまとめると、表５のようになる。

表５　話者別否定形式の使用状況

(a) 標準形

形式	4M	6W	2M	1M	3W	5P	7P	8P
動詞＋ナイ	○	○	○	○	○	○	○	○
動詞＋ナイデス	○	○	○	○	○	○	○	○
動詞＋マセン	×	○	○	○	×	×	◎	○
イ形容詞＋クナイ	○	○	○	○	○	○	○	×
ナ形容詞＋ジャナイ	○	◎	×	○	○	×	×	○
名詞＋ジャナイ	○	○	○	○	○	○	○	○
確認された形式の種類数	5	6	5	6	5	4	5	5

(b) 方言形

形式	4M	6W	2M	1M	3W	5P	7P	8P
動詞＋ン	◎	○	△	○	△	×	○	×
動詞＋ンデス	◎	○	×	×	×	×	×	×
確認された形式の種類数	2	2	-	1	-	-	1	-

(c) 非標準形

形式	4M	6W	2M	1M	3W	5P	7P	8P
動詞＋ジャナイ	×	×	×	○	◎	×	×	×
動詞＋コトナイ	○	×	×	○	○	◎	×	×
動詞＋ナイデ	×	○	×	×	×	×	○	×
動詞＋イカナイ（禁止）	×	×	×	×	×	×	◎	×
動詞＋マセンデス	×	○	×	×	×	×	○	◎
イ形容詞＋ジャナイ	×	◎	×	×	×	×	×	×
イ形容詞＋コトナイ	×	×	×	×	◎	×	×	×
イ形容詞＋クナイデ	×	◎	×	×	×	×	◎	×
ナ形容詞＋クナイ	×	×	×	×	◎	×	◎	×
ナ形容詞＋ジャナイデ	×	◎	×	×	×	×	×	×
確認された形式の種類数	1	5	-	2	4	1	5	1

*◎は該当項目の全使用の５割以上、○は使用有り、△は表２の（ｉ）（ii）：潜伏している場合、× は使用無し。確認要求のジャナイは除外した。数字は使用があることを１とした場合の合計である。

表５から、次のようなことが指摘できる。

(a) の標準形については、「動詞＋ナイ・ナイデス」「イ形容詞＋クナイ」「ナ形容詞・名詞＋ジャナイ」が一般的である。

(b) の方言形については、話者の方言形の保持状況から、【ン使用者】話者4M・6W・1M・7P・(2M・3W)、【ン非使用者】話者5P・8Pに分けられる。

(c) の非標準形については、「ナイデ中止法＞ジャナイ接続＞コトナイ」の順によく見られる。表２のナイデ（13例）とナクテ（８例）の使用頻度から見ると、ナイデが動詞中止法の典型として認知され、それがイ形容詞・ナ形容詞の領域にまで拡張したものと考えられる（§6.1で詳述）。

(d) 以上の話者ごとの分析を総合し、それぞれの形式の使用率から話者の順位を示すと、次のようになるであろう（・は、同数の場合）。

〔A〕標準形の使用順　：話者6W・1M＞4M・2M・3W・7P・8P＞5P

〔B〕方言形の使用順　：話者4M・6W＞1M・7P＞2M・3W・5P・8P

〔C〕非標準形の使用順：話者6W・7P＞3W＞1M＞4M・5P・8P＞2M

標準語形の使用率は、どの話者もある程度同じであると判断される。一方、方言形と非標準形の関係から考えると、（話者2M・3Wも含め）ン使用者のうち、方言形の使用順位より非標準形の使用順位が高くなる話者6W・7P・3W・5P・8Pと、低くなる話者1M・4M・2Mに分けられる（順番は非標準形の使用率順）。たとえば、もっともンの使用が多い話者4Mは非標準形の使用は下位に属する。つまり、方言形を保持しながら安定的な否定表現の運用を見せるM層と、方言形を保持するが、非標準形の多い運用を見せるW層・P層に分けることができよう。なお、W層・P層の場合、非標準形使用の度合いから見ると、W層が多少使用率が多く、運用が不安定にも見えるが、標準形も同時に考慮すれば、限られた形の否定形式の運用を見せるP層よりW層がより多様な否定表現を駆使していると言える。

4. 5. 他地域の高年層日本語との比較

最後に、韓国高年層日本語の実態をさらに浮き彫りにするために、方言形ンと標準形ナイの使用頻度を、動詞のタイプ別に、同じく旧植民地日本語を保持する台湾高年層や関西在住の在日コリアン一世（以下、「在日高年層」とする）と比較してみる。三つの地域の否定辞使用の状況を示すと、表６のようになる。

表6　動詞のタイプ別使用状況（韓国・台湾・在日高年層）

動詞／形式	五段動詞			一段・サ変・カ変動詞		
	韓国	台湾	在日	韓国	台湾	在日
ン	11(10)	252(54)	111(44)	−(0)	−(0)	42(48)
ヘン	−(0)	−(0)	120(48)	−(0)	−(0)	17(19)
ナイ	104(90)	211(46)	19(8)	100(100)	307(100)	29(33)

*（　）内は割合。台湾高年層は簡（2006）、在日高年層は金（2005）のデータを筆者がまとめなおした。

表6を見ると、在日高年層では動詞の活用に関係なく、ナイとンの両方が使用されているが、台湾・韓国ではンの使用は五段動詞に限られることが分かる。

一方、韓国高年層と台湾高年層の違いを見ると、韓国高年層のンの使用率（10％）は台湾高年層（54％）に比べて非常に低く、否定辞の使用はナイ（90％）に集中していることが分かる。しかも、台湾高年層の否定表現には、「イカン、言ワン、要ラン、〜キラン、探サン、足ラン、炊カン、飲マン、取ラン」などの多様な形式が見られ、同じく西日本出身の教師が多かったという条件のもとにありながら、韓国高年層のほうが質的にも量的にも方言形ンの保持度がかなり低い。

以上のように、方言形の使用率が「在日＞台湾＞韓国」の順になることについては、使用環境が維持されているかいないかが関与していると考えられる。ヘンも保持する（関西圏）在日高年層は、日本語を日常生活語として使い続けており、ナイの使用率がかなり低い。在日高年層のナイ使用率は韓国高年層のン使用率と同じくらいに低く、両者はンとナイの使用率において正反対の傾向を見せる。また、両者の中間に位置づけられる台湾高年層は、母語の異なる話者間で意思疎通をはかるために、（台湾高年層全体のおよそ２％を占める北京語の話せない話者によって）現在も日本語が使用されている点で、韓国とは事情を異にしている（簡2004）。

その他、韓国と台湾とで方言形の使用率に違いが生じる要因としては、戦前の日本人教師の割合ということと、両地域の言語教育体系の違いが考えられるかもしれない。前者については、1940年頃の台湾の公学校における日本人教師の割合は、韓国の約１割をはるかに超える約1.6倍（台湾人：日本人＝6752人：10774人）であった（簡2004）。また、言語教育体系ということでは、この時期、台湾では話し方を中心に、韓国では読み方を中心に、教育が行われていたということがあるが（山口1939：12）、これは現段階では推測の域を出ない。今後、さらに追及すべき課題である。

5．否定形式使用の諸要因

本節では、方言形ンを使用する話者4M・6W・1M・7Pに焦点を当て、これらの話者が、有標性の高い（有標性については以下の分析を参照）方言形ンをどのような場合に使用しているかを、言語内的要因・外的要因の両面から考察する。具体的には、言語外的要因として、§5.1で当時のインプットと現在の使用意識を確認し、§5.2で実際のスタイル切換えの様相から話者間の違いを見る。続いて、言語内的要因として、§5.3で共起する動詞の特徴から、また、§5.4でンのモーダル性・終助詞との共起関係・人称制約などの側面から、方言形ンの使用される条件を明らかにすることを試みる。

5. 1. インプットおよび使用意識

まず、当時の日本語習得状況および方言形否定表現の使用意識に関する聞き取り調査の結果から見ることとする。

方言形ンについては、すべての話者が、目下向けのインフォーマルな場面で使う形式だと内省している。これに関連して、教科書には否定辞ンが出てこなかったという証言もある。しかし、ンが方言だという認識も特に持っているわけではない。以下、話者ごとにその意識を見る（話者1Mと8Pは未調査）。

(a) 話者4M：戦前、「お前どうしてワカランか」という文を自分で使っていた。「食ベン・食べヘン」は聞いたことがない。ンはぞんざいなことばである。
(b) 話者6W：実際の談話で産出しているオラン・ワカランは間違いである。しかし、デスが付くオランデス・ワカランデスは間違いではない。
(c) 話者7P：ンは先生には使えず、友達に使うことばである。
(d) 話者2M：オランは分からないが、ワカランヨは目下に使うことばである。
(e) 話者3W：校長先生の使っていた「わし、ワカラン」という文を覚えている。
(f) 話者5P：ンを先生が使っていた。先生にはワカラナイデスを、友達にはワカラナイを使う。「貴方、何をしたか？それ、ワカラン」のように会話を展開する。ワカラン／ワカラナイ／ワカラナイデス・ワカリマセンの違いを母語の待遇法（molla／molukyessta／mollukyesssupnita）に対応させている。

以上のように、ワカランを中心に方言形ンの理解能力を全員が保持しており、全員が

インプットを受けたことは間違いない。特に、話者4Mが生産的にンを使用しているのは、小学校では朝鮮人教師が多かったが中学校では朝鮮人教師が一人しかいなかったこと、週2時間ほどあった軍事訓練（教練）や2週間ほどあった勤労奉仕のとき、配属将校の日本人教官から悪口まじりのカジュアルな日本語がインプットされたこと、自らアウトプットの経験があったことなどが影響していると考えられる。

また、当時、日本人との接触は教師とのインタラクションが多かったとのことである。そのため、ンは「先生が生徒向けに（目上から目下への言葉使いとして）使う専用のことば」「友達を対象に使うことばであり、目上には使えないことば」というイメージがついたのであろう。ンを使用しない話者のうち、ンが潜伏している話者2M・3Wやンの使用が見られない話者5Pは、§4.1.2で述べたのと同様、日本人教師が朝鮮人教師より少なかったためにンのインプット量が制限され、さらにワカランを待遇度のもっとも低い否定表現（molla）に対応させるという母語の待遇意識も関与し、ンが初対面の会話ではなかなか出にくい形式になっていると考えられる。

5. 2. スタイル切換え

次に、上のような言語意識が実際の言語運用ではどのように現れるのかを見るために、話者4M・3W・5P・7Pに対して行ったスタイル切換え調査（§3.3.1）の結果を見てみよう。動詞否定文における丁寧体の使用状況をまとめると、表7のようになる。

表7から、スタイル切換え調査を行った話者4名のうち、〔対中年談話〕から〔対若年談話〕になると、丁寧さの度合いが格段に低くなるのは、話者4Mと7Pであることが分かる。

表7　動詞否定文における丁寧体の使用状況

節＼話者		4M ㋕		6W㋕	2M	1M㋕	3W		5P		7P ㋕		8P
		中	若				中	若	中	若	中	若	
主節	普通体	1	12(3)	2	2	25(1)	16	16	24	20	1	10(2)	4
	丁寧体	8	3	24	12	5	9	1	10	7	23	4	16
	丁寧体出現率	89	20	92	86	17	36	6	29	26	96	29	80
従属節	普通体	8(1)	4(1)	13(1)	8	15	13	9	6	5	9	4	2
	丁寧体	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	1	2
	丁寧体出現率	-	20	-	-	-	-	-	-	-	25	20	50

*テンスによる区別をせず集計している。㋕は方言形ンの使用者であり、（　）内はそのうち方言形ンの数である。普通体にはン・ナイ、丁寧体にはンデス・ナイデス・マセンが含まれる。存在否定および動詞以外の否定形は含まれていない。

話者4Mの例（24）は、丁寧体「食ベマシタ」ではなく、普通体「食ベタ」を用いて気楽に会話するように促した直後の発話である。

（24）4M：あ、ま、たくさんは、飲マン、でけど、すこし、すこし、いっぱい、二杯、そうですね。〔対若年〕

方言形ンはこのような〔対若年談話〕に出やすく、フォーマリティが低い目下向けのマーカであることが確認される。換言すれば、使用意識で見たとおり、方言形ンは聞き手が目下であるという認識を持ってこそ表出されるものである。また、話者7Pも〔対若年談話〕でンを用いているが、〔対中年談話〕になると、ンをまったく使わなくなり、マセンの使用が急増する（表２参照）。

一方、方言形ンが潜伏していると考えられる話者3Wは、〔対中年場面〕でも待遇性による切換えは行わないものの（36％）、例（25）のように文への注意度が低下した場面で、ンとナイが重なって出現している。

（25）3W：どんな公式ってたら、たてよこがけとか、こんな、円というものを解釈しだら、円とどんなんして解釈する、円というものはこんなものだという、いってい点を中心として、一回転進めたら線のあとを円という。四方形は、正方形は相対するかくは、等しく［等しく、はい］、あいだい線が等しいものが正方形だ。ぐけいは、あいだいするかくは等しく［え］、あいだいする線が、平行線、なんというか、ちょっとそれは分カランナイ。忘れたな。｛笑い｝〔対若年〕

発話例（25）は現在も鮮明に覚えている、やや長めの数学公式を早口で話す途中で該当する用語が思い出せず、ことばを探す様子（点線箇所）が見られる。これは、単語検索に集中し、注意度が低下したところで、潜伏していたンが表出されたものと考えられる。なお、話者6Wにはワカランが見られず、丁寧体のワカランデスのみが１例見られるが、内省調査でもデスを後接しないワカランの使用は間違いだと回答している。ここからも、ン単独の使用はスタイル面で非常に制限されることが分かる。

以上から、方言形ンはもっともカジュアルな場面で相手への待遇意識や文への注意度が低下したときに出やすい形式であるといえる。前節の使用意識もふまえると、話者2M・8Pにンが用いられないのは丁寧体ベースの談話を行っているためと考えられる。

しかし、丁寧さの度合いが低い話者1M・3W・5Pにおいて、なぜンの出現頻度が少ないかについては、インプットやスタイルなどの言語外的要因以外にも何らかの制約が働くことが考えられる。以下では、§4.でまとめた使用状況を、言語内的側面から探ってみる。

5. 3. 出現動詞の特徴

§4.の使用状況から分かるように、否定表現の産出において否定辞ンはナイが持っている生産性や活用体系を失いつつ、一部の動詞に（語彙化した）チャンクとして保持されている可能性が高い。このことを確認するために、ここではまず、ンの生産性を、前接する動詞のタイプから整理する。

否定文で用いられた動詞を出現数が多い順に示したのが表８である。全体的に出現数が少ないため、丁寧体も入れて考えることとする。

表８　上位出現の動詞

動詞／形式	分カル	デキル	スル	忘レル（i）	行ク（ii）	使ウ（iii）	来ル	オル	行カレル	生マレル（iv）	入ル	ヤル（v）	…	読ム（vi）	飲ム
ン	5	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	…	-	1
ンデス	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	…	1	-
ナイ	71	40	21	14	7	2	5	3	3	3	2	3	…	-	-
ナイデス	21	8	5	1	6	8	1	2	1	-	2	1	…	1	-
マセン	15	5	6	-	1	2	-	-	-	-	-	-	…	-	-

*テンスおよび文中の位置は区別せずに集計している。（i）忘れられナイ３例・忘れてナイ２例、（ii）行けナイデス２例、（iii）使えナイ１例、（iv）生まれてナイ１例、（v）やられナイ・やれられナイ１例、（vi）読められナイ・読めナイ１例は含まない。「･･･」には「アガル・カカル・住ム・出ル・見ル・言ウ・歌エル・覚エル・話サレル＋ナイ（デス）」が１例ずつ入る。

この表および用例から、以下のことが理解できる。

(a) ワカルと２拍五段動詞

韓国高年層におけるンの使用は、その19例すべてが「分カル（話者4M（11例）・6W・1M・7P（２例））、飲ム・読ム・ヤル（話者4M）、オル（話者6W）」のように一部の五段動詞に限られている。また、ワカランを除けばすべて２拍語のみである（26）[15]。

(26) 6W：分かる人（知り合い）もオランシ、

§4.5で見た台湾の使用状況と同じように、五段動詞でンが保持されやすく[16]、なかでも、ひとかたまり性の強いワカランは長期にわたって存続しやすい[17]。

(b) ヤル

次に、方言形ンを生産的に用いる話者4Mに、〔対若年談話〕で例（27）のようなヤランが見られる。

（27）4M：暑い時は（ゲートボール）ヤラン。{笑い}、私、ヤラン。〔対若年〕

このヤランの使用は、活用における単純化とむすびついていると考えられる。このことを確認するために、表9を見てみよう。これは、ワカル・ヤル・スルの3つの動詞について、話者ごとに否定形式をまとめたものである。

表9　主要動詞の話者別否定形式

動詞＼話者		4M 中	4M 若	6W	2M	1M	3W 中	3W 若	5P 中	5P 若	7P 中	7P 若	8P
ワカル	ナイ	-	-	10(4)	2(1)	10(1)	12(5)	7(1)	14(4)	10(3)	4	2	3(2)
	ン	1(6)	4(3)	1(1)	-	1	-	-	-	-	-	2	-
ヤル	ナイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	5(1)
	ン	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スル	ナイ	5	-	7(3)	1	1	5(1)	-	-	4(1)	1	-	-
	ン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

*テンス・文中の位置は区別せずに集計している。（　）内はデス体の数であり、ヤルとスルには「ンデス」形がない。また、スルノジャナクテ（1M・3W）は含まれていない。

この表を見ると、話者4Mの〔対中年談話〕ではシナイが5例見られるが、〔対若年談話〕ではシナイが見当たらない。これは、話者4Mにとって、ンが使用したいにもかかわらず、サ変動詞では語幹をセにしないといけないという活用上の負担がかかるために、センを回避して〔対中年談話：シナイ〕〔対若年談話：ヤラン〕のような使用を見せるようになったものと思われる。

なお、こういった活用の単純化によるヤルの使用は、可能表現において、デキルを使用せず、接辞（ラ）レルによる派生可能形を生成する傾向の強い話者の場合にもよく見られる（黄2007）。また、もっとも低いレベルの話者7P・8Pがヤラナイを使っているところからも、この単純化は推測される[18]。

(c) 未然形

ちなみに、丁寧体の場合、例（28）（29）のように未然形を用いて否定の意味を表そうとする例が見られる。これは、否定表現における「未然形一本化」という単純化として理解することができよう。(⇒は正しい言い方を示す)

(28) 6W：60年の時に、国語を、一回も使ワマセン。⇒使イマセン

(29) 2M：男の先生も、結婚しない、人は、女学校に行カラナイんですよ。⇒行ケナイ／行カレナイ

しかし、韓国高年層日本語の否定表現使用に関わる要件は、動詞の活用の問題だけでは整理できない。以下では、形態面以外でナイとンの使用にどのような意味的使い分けがあるのか、文やコンテクストレベルまで視野を広げ、使用がもっとも多いワカランのモーダル性を中心に考えてみる。

5. 4. モーダル性

もう一度、表８を参照されたい。動詞ワカルの使用数は、〔ワカラナイ71例・ワカラナイデス21例、ワカラン５例・ワカランデス９例〕となっている。ワカラナイ・ワカラナイデスがもっとも多く、頻度を基準とすれば、ワカラナイが意味的に中立的な無標の形式だと考えられる。それに対してワカランは、例（30）に見るように「強い打消し」というムード的意味を持っているように思われる[19]。

(30) 7P:｛二人で歌う｝［いりひうすれ、意味は？］、うつれ、［んー］、それは分カラン。〔対若年〕

また、例（31）は日本から入ってきたコドリ（＝花札）を日本人の聞き手が知らないとはおかしいという文脈で表れた文である。

(31) 7P:コドリ（花札）分かる？分カラン？コドリが日本で来たのに、〔対若年〕

波線のような中立的な単純疑問の後に用いられ、「強い確認」というモダリティ的要素が付け加えられている。

この、ワカランの持つモーダル性は、(a) 終助詞との共起のあり方、(b) 人称制約とい

う点からも確認することができる。

(a) ワカランと終助詞

まず、終助詞との共起という点で、例（32）では、話がまとまる談話の終盤で、戦争の悲惨さが聞き手には分かるはずがないという意図をもって、目下である聞き手を明示した後、強い主張を表す終助詞ヨとともにワカランを使用している。しかし、ワカランには、この１例を除けば、終助詞が下接した例は見当たらない。

（32）4M：〔談話の終盤〕（戦時のことは）あなたも分カランヨ。〔対若年〕

それに対して、ワカラン以外の、ワカランデス（９例中、ヨ４例・ネ３例）やワカラナイ（71例中、ワ３例、ネ２例、ヨ２例、ナ２例）、ワカラナイデス（21例中、ネ４例、ヨ７例）などの場合、終助詞はより下接しやすい。これは、ワカランのもつモーダル性が終助詞の担うものと同様のものだからだと思われる。たとえば、ンの産出が見られない話者5Pは、理解できなかったインタビュアの話に対してワカラナイの後に終助詞ヨを下接して、「強い打消し」とともに説明を求めている（33）。

（33）NS3：kimchi（キムチ）は金さんの家で作ったkimchi（キムチ）ですか。
5P：それ、よく分カンナイヨ。〔対若年〕

このように、「強い打消し」を表すために、ワカランには終助詞を下接しにくい一方で、ワカラナイには終助詞を下接させてモーダル性を補いうることが分かる。

(b) ワカランの人称

方言形ンを述語に持つ文の主語は、例（34）のように、そのほとんどが一人称と二人称であり（一人称：14例、二人称：５例）、客観世界を描くだけの三人称文での使用例は、先の例（26）のオラン1例しか見当たらない。

（34）4M：あなたは分カランデスケド、［ん］、（中略）そういう歴史が、それ、そうで、分カランデスヨ。［そうですね］、あなたは、分カランデスヨ。〔対若年〕

このことも、方言形ンのモーダル性が強いことを示す事象であろう。ただし、前述のワカランに比べ、例（34）のようなワカランデスは丁寧体が連接されることにより、ワカランのもつモーダル性が弱まっていると考えられる。

以上、§5.では、方言形ンの使用を左右する要因について考察し、その使用には、待遇性･注意度が強く働くこと（§5.1、5.2)、共起する動詞のタイプにかたよりがあること（§5.3)、ンにはそもそもモーダル性が内在しており、終助詞との共起上の制約、人称の制約などとなって現れていること（§5.4)、などを明らかにした。

6．その他の否定表現の特徴

本節では、補足として、これまで言及することのなかったナイデ・ジャナイ・コトナイといった諸形式について整理しておく。

6. 1. ナイデ中止法

話者6W・7Pは、動詞・形容詞を問わず、ナクテを用いるべきところにナイデを用いる例が見られる（例（35）および§4.2の例（17）（18））[20]。

(35) 6W:この作るものと（折り紙の時間)、歌、ce（あの)、ileの勉強（日本語の時間）と、合ワナイデ、時間が合ワナイデ［はい]、⇒合ワナクテ

一方、ナクテが見られるのは話者4M（1例)・6W（3例)・1M（3例）のみである（36～38)。

(36) 4M：韓国人、まじって、住マナクテ、kulyato（けど)、田舎は、どー、そういうことができない、じゃない。〔対中年〕
(37) 6W：そう、使ワナクテ忘れたよ。
(38) 1M：このころは日本語シャベラナクテ、舌もよく回らないです。

話者6Wには、同じ動詞ワカルについて、ワカラナイデとワカラナクテを併用している状況も観察される（39）（40)。

(39) 6W：私が分カラナイデ、aiyu（ふう)、すみません。⇒分カラナクテ
(40) 6W：時計見たら、分カラナクテ、cenpwu（みんな)、逃げるよ。

韓国高年層日本語でこのようなナイデが使用されるのはなぜであろうか。

このことの理由には、§4.4（c）で述べた要因のほかに、当時使用した教科書にナイデ中止法が頻用されていたことがあるように思われる。話者7Pは、『初等國語讀本』十巻第十二課「水彩画」21）に出てきたナイデを鮮明に覚えている（41）。

（41）7P：水彩が、この夏書いた水彩が今出してみれば懐かしいかんなの花の地の色よ町のいとこが帰る時あれほどほしいと言ったのをついヤラナイデそのままに別れたこともを思われる、ふと描き出す夏の夢外はチラチラ雪が降るkhanun（という）詩、詩〔対中年〕

高学年になって統一される国定第四期（1933年～）の教科書『小學國語讀本』では、ナクテは、「名詞＋デハナクテ」や「非存在のナクテ」、禁止・義務の「ナクテナラナイ」などの形で多用されている。一方、動詞中止法としては、ナイデが、例（42）の他に（補助用言用法７例を除いても）12例見られるからである（ナクテは４例）。

（42）おとうさんの説明によると、「たこ」といふ物は實に妙な物で、あの普通に頭といつて居る所が實は胴で、胴から足が出ナイデ、頭から足が出て居るのださうです。『小學國語讀本』巻八（第四学年後期使用）第二十四課「水族館」

韓国高年層日本語の保持のあり方に、インプットの影響がうかがわれるところである。

6. 2. ジャナイ・コトナイ

次に、韓国高年層日本語には、体言化した動詞にジャナイを下接させて否定文にする例、たとえば、「教育スルン・帰ルン・決マッタノ・募集シタン＋ジャナイ」が見られるという特徴がある（43）（44）。

（43）3W：学校で日本語教育するンジャナク、ん、学院で〔対中年〕
（44）3W：帰るンジャナク、（トイレに行く）〔対中年〕

これらは、「名詞＋ジャナイ」の表現が、動詞にまで拡張して使用されるようになったものだと考えられる[22]。

また、これと同じく、用言を形式名詞によって体言化してから否定表現を加えるタイプとして、「動詞＋コトナイ」や「形容詞＋コトナイ」といった例もあった（45）。

(45) 3W:植民地化しておさめたからな、そう感じがよいコトハナイだろう。〔対中年〕

例 (45) 以外にも、韓国語の統語構造と一致する「忙シイコトナイデス」「難シイコトモナイデスネ」が見られた[23]。韓国語からの転移がうかがわれるところである。

以上、本節では、「動詞+ナイデ」「動詞 (ン) +ジャナイ」「動詞・形容詞+コトナイ」といった否定形式を見た。これらの形式は、いずれも、日本語習得上の中間言語においてごく一般的に見出されるものであるが[24]、他方、韓国高年層日本語では、学習の初期段階でよく観察される「一語文のナイ」や「辞書形+ナイ」などは見られない。もし、家村 (2001) の言うように、否定形の発達過程がどの学習者にも共通しているとすれば、韓国高年層日本語は、言語習得終了時点 (1945年) において、学習初期の段階を超えていた可能性が示唆される[25]。

なお、否定形式の安定的な体系を保持しているM層とP層 (§4.4) との間に位置づけられる話者6W・3Wの非標準形が、韓国高年層日本語の否定形式の体系を一層複雑にさせている。しかし、その一方で化石化が起こっているかについての検証が課題として残る。

7. まとめ

以上、本稿では、60年前に習得が途切れた韓国高年層日本語に見られる否定表現を対象として、第二言語の保持という点から考察を加えてきた。本稿で明らかになったことを、方言形と標準語形の二軸に分け、具体的にまとめると、以下のとおりになる。

(a) 韓国高年層話者は、かつて方言形ンと接触した可能性は高いものの、方言形ンの保持度は低い。丁寧体では、ナイデス>マセン>非標準形ンデスの順で使用頻度が高く、ナイデスは非母語話者の朝鮮人教師によってインプットされた可能性も考えられる (§4.1)。

(b) 動詞、イ形容詞、ナ形容詞・名詞の否定形の話者別使用状況からは、方言形ンを保持しながら (または、潜在させながら)、安定した否定表現の運用を見せるM層と、非標準的な否定表現を多く用いるW層・P層に分けられる (§4.2、4.3、4.4)。

(c) 他地域の高年層日本語と比較すると、戦前の (西日本出身の) 日本人教師数と戦後の日本語使用環境が方言形ンの保持度と強い相関関係にあり、在日>台湾>韓国の順で方言形ンがよく保持されている (§4.5)。

(d) 方言形ンは、インプット的な要因から目下向けのぞんざいな形式として意識されて

おり、その使用意識どおり、相対的に待遇度の低い〔対若年談話〕や文への注意度が低下したときに表出しやすい（§5.1、5.2）。

(e) 方言形ンは、ワカルと2拍五段動詞に後接しやすいこと、活用の複雑なサ変動詞への接続を避けて動詞ヤルが用いられやすいこと、モーダル性を内在させているため三人称主語をとりにくく、終助詞との共起制限を受けることなどの言語内的要因が働いている（§5.3、5.4）。

(f) 韓国語の分析的統語構造と一致する「動詞・形容詞＋コトナイ」の使用をはじめ、一般的な習得の過程でよく観察される「動詞＋ナイデ」「動詞（ン）＋ジャナイ」が小学校卒業後、職場で日本語を使用したW層を中心によく見られる（§6.）。

今後、本稿で設定した話者の社会的属性ごとに、もっともカジュアルな場面で談話を収集し、そこに現われる否定形式と話者の属性との相関性を追及することにより、推定にとどまったいくつかの論旨が浮き彫りにされるであろう。また、第二言語の保持段階における日本語否定表現の普遍的な特質を明らかにするためには、他地域の高年層日本語と動詞以外の否定形式のバリエーションをも比較することが課題として残る。

【謝辞】

インタビュアとして協力してくださった方々、インタビューに応じてくださったインフォーマントの方々に心よりお礼申し上げます。

【注】

1）朝鮮総督府（1941：36～37）『統計年報』によると、植民地時代の韓国の人口（23,709,057人）は、朝鮮人（22,954,563人）が97％、内地人（689,790人）が3％を占めている。その韓国在住日本人の出身地をみると、人数の多い順に、九州、中国、近畿、四国、関東、東北、北陸、東海、東山、北海道、沖縄、樺太で、西日本出身者（534,317人、全体の77%）が多いことが確認される。また、日本統治期間を通してこの順位はほとんど変わらない。

2）大西（1944:22）がこれにあたる。また、朝鮮在住の教員が出版した記録風の小説である飯田（1942）に「知らん・～かもしれん・いかん・ならん・出来ん・見えん」などが見当たり、和田（1940：36～37）にも「そんなことあるかも知らん・ちょっと見い」が関西方言的要素を含んだ用法としてあげられている。

3）前者のretention以外にmaintenance、preservation、後者のattrition以外にもdecay、death、loss、regression、erosionなど、さまざまな関連用語が混在している。

4）現在、日本語の否定表現については、方言形と標準語形との接触により新しい中間方言形が生み出されるなどの変化が指摘されている。植民地時代に韓国への移住者がもっとも多かった九州では、否定辞ンは今なお衰退傾向にない、根強い方言とされており、「居ラン→居ラナイ」のような接触新語がある一方で、否定辞変換による「行けナイ→行けン」のような新しい方言形式も生み出されている（陣内1996）。

5）家村（2001）は、（動詞）辞書形＋ナイ→ジャナイ→活用混同型の順で誤用が消滅するとしている。また、ジャナイをモダリティのジャナイと命題のジャナイに分けている。これは話し手の態度的側面（志向作用的側面）に関わる主体的否定（modal negation）と事態の客観的側面（志向対象的側面）に関わる客体的否定（propositional negation）の区分（工藤1992）と同様な区分であろう（工藤（1992）では、前者の例として「スラヘン」、後者の例として「セン」の否定文が挙げられている）。韓国高年層の「ン：ナイ」の対立は、このような西日本方言の「ヘン：ン」の機能的構造に対応しているものと考えられる（§5.4）。

6）朝鮮総督府（1941：2）『統計年報』では、学生数がそれぞれソウル195,914名、大邱（デグ）160,498名になっている。また、【現住人口府別（日本人）】を見ても、在朝日本人の数は京城（ソウル）930,547人、平壌283,517人、釜山240,033人、大邱193,414人、仁川180,216人の順になっており、当時から、この二都市は日本語との接触が多い環境だったと思われる。

7）本稿で取り上げるインフォーマントは、（言語習得終了時点とみなされる）1945年終戦時に日本語習得が止まり、その後、書物やNHKなどのメディアを通した接触は若干あったものの、本格的な日本語との接触はほとんどない（典型的な第二言語の保持状態にある）8名に限定している。詳しくは、黄（2007）を参照されたい。この８名が韓国高年層全体の代表になるとは言えないが、予備調査での聞き取り調査や日本語教育史を参考にすると、現在の韓国高年層における学習者の類型は、だいたい本文で取り上げた属性によって特徴づけることができると考える。なお、談話内容から、聴き取りに問題があったものや、回避的な談話管理が強いものは除外した。

8）インフォーマントの日本語能力については、実際の談話データを日本語母語話者二人に聞かせ、判定してもらったものの、正確さ・流暢さなどの判定基準によって判断がずれるところがあった。最終的には、インフォーマントの属性や他の言語項目をも総合的に考慮し、筆者がその順位を決めた。

9）NS1・NS2は大学教員であり、インフォーマントにそのことを認識させることによってスタイル差を引き出すことにした。NS3は話が盛り上がった談話の中盤からは普通体を混ぜながら応対するようにし、インフォーマントにも普通体で会話するように促した。（社会的地位や年齢によって言語スタイルが大きく異なる韓国人の言語行動面での特徴を生かした）このような措置で、韓国高年層日本語のスタイルを網羅的に引き出そうとした。しかし、実際は、日常語ではない日本語を用いるため、初対面の日本人インタビュアを相手にフォーマリティを調整できない／しない場合も多かった。そのため、場面設定に

よる差は鮮明ではなく、結果的に、スタイル切換え調査を行った話者4名中、話者3W・5Pはいずれも普通体ベースの会話になっている（表７参照）。

10）話者5Pにソンナラ・買ウテ来タ・オル・ホンナ・ホンデなどの西日本方言的な形式が複数使われていること、話者8Pも当時大阪出身の女性の教師がいたという本人の証言やオルの使用が見られることから、すべての話者が方言形の否定表現に接触した可能性は十分あったと思われる。

11）談話のなかでンの使用が見られない話者3Wも、内省を聞いた翻訳式調査では「昔はご飯を食べラレン人もあった」のように従属節内でンを使用している。

12）現代日本語の小説のテキストを対象にした福島・上原（2003）は、福島・上原（2001、2002）の自然談話の調査と共通する結果として、ナイデス形はマセン形に比べて、上の立場から下の立場の者へ、あるいは同等の親しい者への発話や酒の席など改まり度が低い場面で多く出現しているとする。また、性差については、小説の場合、ステレオタイプの反映により、ナイデス形が男性に多用されているとする。

13）金（1931：67～70）には以下の記述が見られる（原文のまま引用）。

—えんぴつあるかい？ナイデス。—ぢゃ、小刀は？やっぱりナイデス。これで悪いとはいはないが、内地の子供ならいくら無愛想な子でもかうはいはない。「ありません」「ございません」「売切れです」「お生憎さま」何んとかいふをつける。朝鮮の子供たちとてさうした言葉を知らないわけではない。知識としては心得てゐても生活感情がそれに副はないだけである。

14）ハングルのローマ字表記はYale方式による。

15）現在、ナイ・ン・ヘンの三つの否定辞を運用する関西若年層でも、３拍以上の五段動詞でンが多用されるのは「分カル」１語だけであるとされる（高木2004）。

16）台湾高年層を調査した簡（2006）でも、ンのうち、ワカランの出現頻度は48％（121／252）であり、高い使用率を見せる。なお、高年層同士の会話よりフォーマルなスタイルである日本人母語話者との会話でンの使用率が高くなっているが、これについては、ワカランを多く用いるという「語彙的な問題」が関わるとしている。

17）木口（2004）は韓国高年層日本語を調査しつつも方言形ンを考察対象としていないが、本稿の追試として同様な結果が得られることを示すためにコーパスデータ化した木口（2004）からンを抽出してみた。すると、「分からん」が顕著に多いことが確認できる（下の表）。

また、本稿の予備調査では、戦後に日本語との接触経験があるために対象外とした７人のうち、女性１名（小学校卒・戦後、福岡滞在経験１年）において、「分カラン・知ラン・ナラン・習ワン・セン」の５例が使われている。木口（2004）では、話者の学歴や接触度にバラツキがあり、話者の属性による規則性は明らかでないが、方言形ンの使用は男性に多く、女性では4Fのみが生産的に用いている。これについて、他の話者に比べて4Fは幼稚園の頃から日本人と接触する環境の中にいたという特徴がある。

話者 / 否定形	男性						女性							計
	1M	2M	3M	4M	5M	6M	1F	2F	3F	4F	5F	6F	7F	
分カラン	2	-	-	1	-	-	2	-	-	1	7	-	-	13
分カランデス	-	1	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	6
知ラン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2
知ランデス	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ナラン	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
使ワン	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イカン	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
言ワン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
許サン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
使ワレン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
入ラレン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1

*話者 4F・5F には「そんとき、なんや」が見られる。

18) 木口（2004）でも、使ワレン・入ラレン（注17の表）は見られるものの、サ変・カ変動詞の使用例は見当たらない。

19) 遠藤（1970）は、ナイとンのうち、ンが強い否定や尊大な態度を表すとするが、工藤（1992）や高木（2004）はンとヘンにおける、そのような対立について否定的である。

20) ナイデ・ナクテの用法の異同は、前件と後件の主語の異同や前件と後件の動詞の素性の組合せといったものが関与し、主にナイデは付帯状況の用法、ナクテは原因・理由の用法として意味を分担させながらも、周辺的な用法では自由変異となっている（日高1995）。このことが、学習者にとって、両形式の使い分けを紛らわしいものにしているであろう。

21)『初等國語讀本十巻』は朝鮮第四期（1939年～1941年）に発行されたものである。これは、（第3次）朝鮮教育令の改正により、学校制度が「内地」の小学校令にもとづくことになった時期にあたる。朝鮮人児童は『初等國語讀本』を第一学年から第三学年まで使用し、「内地人」児童は第一学年から第三学年まで『小學國語讀本』を使用していた。両者とも第四学年からは『小學國語讀本』の巻7に続くことになっている（上田1999）。

22) ただし、この形のジャナイがすべて否定を表すわけではない。〈確認・喚起〉のモダリティ用法としても使われている。

（イ）3W：歩けないんですよ。フィルチェがそこにあるンジャナイデスカ。

（ロ）5P：小さい時は、mwe、たれも楽しく遊ぶンジャナイデスカ。

23) これは「忙シイ〔pappun〕ーコト〔il (kess)〕ーナイ〔epta〕」の構造であり、コトとナイの間に助詞ハ・モが入ることによって弱い否定になる。森山（2000）は、「語幹＋否定＋丁寧」という形態素の配列順序による「ha-ci anh-supnita（シーナイーデス）」の構造から、認知上の転移の可能性を主張するが、こ

れは文語体（長否定）の場合であり、口語体（短否定）の場合、動詞語幹の位置が否定の後になる。また、後述する「分かる」の場合、韓国語のワカル（alta）とそれの否定ワカラナイ（moluta）は対応語彙が異なる点もあり（これらがひとかたまり性の強いワカランの保持に影響を与えるようにも考えられるが）、まだ検証の余地が多いところである。談話では、韓国語の慣用表現をそのまま訳した〈例１〉、「amwu（全然）」の出現から考えると韓国語の構造と一致する、名詞化した形容詞否定の〈例２〉が見られる。本稿では、〈例１〉〈例２〉も考慮に入れ、本文の例を韓国語の影響をうけたものとみなす。なお、「動詞＋コトナイ（17例）」も同様な解釈が可能であろう。

〈例１〉5P：夏は暑いから、10時から、12時まで眠リガコナイから（眠れない）

〈例２〉7P：分からない人は、amwu（全然）面白ミガナイじゃないですか。

24）動詞と共起するナイデは日本語習得の中間段階で、ンとノの挿入によるジャナイは「上級の上」のような発話レベルの高い話者から観察されるものとされる（家村2003）。また、学習者においてジャナイはクナイとともに分析できないかたまりである可能性が高いとされる（家村・迫田2001）。なお、山本（1982）では、ナイデ･ンデを大阪方言の伝統的な方言形としており、工藤（1992）･高木（2004）では、コトナイがそれぞれ愛媛県宇和島方言・関西方言の分析的否定形式として挙げられている。これらのことから、本稿で見られる「ナイデ・コトナイ」の否定表現が方言形ンと同様なプロセスを経て保持されている可能性も考えられる。

25）幼児言語でよく見られる近似否定表現ダメ・イヤ・違ウ・イイエ・アマリ・アンマリなどは、旧南洋群島の高年層日本語では、ある程度見られるとされる（Hayashi1999）。韓国高年層では、これらの表現がそれぞれ０例、６例、11例、２例、７例、５例ずつ見られるが、語用論的否定表現としては使われていない。このことも韓国高年層日本語が一定のレベルを超えていたことの裏付けとなるだろう。

【参考文献】

飯田彬（1942）『半島の子ら』第一出版協会

上田崇仁（1999）『植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究』広島大学博士論文

遠藤邦基（1970）「年齢別にみる共通語化の現象－京都方言をめぐって－」『国語学』第八十集　pp.30 ～ 43

大西雅雄（1944）「満鮮の日本語教室」『日本語』第四巻第十二号　日語文化協會　pp.20 ～ 23

家村伸子・迫田久美子（2001）「学習者の誤用を生み出す言語処理のストラテジー（2）－否定形「じゃない」の場合－」『広島大学日本語教育研究』第11号　広島大学教育学部日本語教育学講座　pp.43 ～ 48

家村伸子（2001）「日本語の否定形の習得－中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて－」『第二言語としての日本語の習得研究』4号　pp.63 ～ 81

――――（2003）「日本語の否定表現の習得過程－中国語話者の発話資料から－」『第二言語としての日本語の習得研究』6号　pp.52 ～ 69

簡月真（2004）『台湾に残存する日本語の実態』大阪大学博士論文　BookPark

――――（2006）「台湾残存日本語に見られる否定辞「ナイ」と「ン」－花蓮県をフィールドに－」『日本語科学』20　pp.5 ～ 25

木口政樹（2004）『韓国における残存日本語の摩滅に関する研究－「韓国人高齢者コーパス」の分析を通して－』韓国中央大学博士論文

金智英（2005）「在日コリアン1世の否定表現の運用」真田信治・生越直樹・任栄哲編『在日コリアンの言語相』和泉書院　pp.141 ～ 158

金素雲（1931）「朝鮮児童の場合」『国語文化』創刊号11月　育英書院　pp.67 ～ 70

工藤真由美（1992）「宇和島方言の２つの否定形式」『国文学解釈と鑑賞』57　pp.134 ～ 120

高木千恵（2004）「若年層方言の否定表現にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16　pp.25 ～ 46

陣内正敬（1996）『地方中核都市方言の行方－九州』おうふう

日高水穂（1995）「ナイデとナクテとズニーテ形の用法を持つ動詞の否定形式－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版　pp.471 ～ 480

黄永熙（2007）「韓国高年層に残存する旧植民地日本語からみた第二言語の維持・摩滅－可能表現を中心に－」『日本学報』第71輯　韓国日本学会　pp.175 ～ 188

福島悦子・上原聡（2001）「現代日本語における丁寧体否定形式」『東北大学留学生センター紀要』第5号　pp.11 ～ 17

――――――――（2002）「『言いません』としか僕は言わないです：会話における丁寧体否定辞の二形式」南雅彦（編）『言語学と日本語教育Ⅲ』pp.269 ～ 286

――――――――（2003）「日本語の丁寧体否定辞二形式に関する通時的研究」『東北大学大学院国際文化研究科論集』第十一号　pp.79 ～ 89

森田梧郎（1942）「東洋における国語教育」『国語文化講座第六巻－日本語進出編』朝日新聞社刊　pp.62 ～ 73

森山新（2000）『認知と第二言語習得』図書出版啓明

安田敏朗（1997）『帝国日本の言語編制』世織書房

山口喜一郎（1939）「わが国の外地における日本語」『国語運動』第三巻第十号 pp.8 ～ 15

山本俊治（1982）「大阪府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一『講座方言学7－近畿地方の方言－』図書刊行会　pp.195 ～ 228

和田重則（1940）「博覧会」『国語運動』第四巻第一二号　pp.36 ～ 37

Gardner,R.C.（1982）Social Factors in Language Retention. In Lambert.R.D & Freed. B.F.（ed.）*The loss of language skills*. pp24-39

Hayashi,B.（1999）Testing the regression hypothesis:the remnants of the Japanese negation system in Micronesia. In Hansen（ed.）, *Second language attrition in Japanese contexts*. Oxford: Oxford University Press. pp154-168

Jaspaert,K.,Kroon,S.,van Hout,R.（1986）Points of Reference in First-Language Loss Research. In Weltens,B.,de Bot.K & van Els.T（ed.）, *Language Attrition in Progress*. Dordrecht, Holland: Foris. pp37-49

van Els,T.（1986）An overview of European research on language attrition. In Weltens,B.,de Bot,K. & van Els,T.（ed.）, *Language Attrition in Progress*. Dordrecht, Holland: Foris. pp3-18

（博士後期課程学生）

（2007年 8 月24日受付）
（2007年10月 1 日修正版受付）
（2007年10月15日掲載決定）